『現代生命哲学研究』第１２号 (2023 年 3 月):153-163

＜研究ノート＞

森岡氏への応答
被産性概念再考

仲井慧悟*

本稿は、先日発表した拙稿（仲井 2023）に対する森岡正博氏からの批判に対する応答を目的として 2023 年 3 月 31 日に執筆された。以下、森岡氏から提起された二つの疑問点に対する応答を述べ、森岡氏が被産性概念の可能性として挙げた点についての私見を述べる。

＊

森岡からの一つ目の疑問点は、筆者が「〈第一の誕生〉より前の〈生まれる〉である〈誕生前の現れ〉にもとづく被産性概念」（仲井 2023: 26）として提起した「出生前被産性」について、第三者の視点からの考察になっているのではないか、という疑問であった。この点は、被産性概念は「ある人間にとって自分が生まれることはどのような意味をもつのか」という一人称的な視点から〈生まれる〉を考えるための概念のはずであることに鑑みれば、批判されてしかるべきであり、拙稿執筆時点から時間を経たいま、筆者自身、反省し、訂正したいと考えている箇所である。

さて、とはいえ、一人称視点からの考察を貫徹するために「生まれてくる胎児本人の視線から」の考察はいかにして可能であろうか。結論からいえば、筆者にはそれがいまだ不明である。したがって、一人称の〈生まれる〉を考えるための概念として被産性という概念を提示したはずの拙稿では、同概念を整合的に提示することに失敗しているといわざるをえない。

拙稿のなかで参照した漫画『透明なゆりかご』に描かれていた胎児をめぐる妻（母）・夫（父）の反応については観察可能であり、当人たちにインタビュー

* 京都大学大学院教育学研究科修士課程（2023 年 4 月より無所属）
電子メール：knakai.edu[at]gmail.com

をすることも可能であり、また自分自身で同様の体験をすることも場合によっては可能である。そのため、比較的考察しやすいといえよう。しかしながら、胎児本人の視点はいかにして考察可能であろうか。

いわゆる〈生まれる〉の前（赤ちゃんがお腹のなかから出てくるよりも前）にすでに周りの大人、特に母親が赤ちゃんの存在を感じとっているという事態は実際に起こっており、それはそれで重要であろう。とすると、胎児本人の視線からの考察が可能であるとすれば、そうした子宮外ないしお腹の外からの大人たちのはたらきかけに対する反応、といった点が重要になると思われる。

ここで詳述する余裕はないが、胎児の経験という困難な主題について考察しているものとして、ペーター・スローターダイク（Peter Sloterdijk, 1947–）の議論が挙げられる。スローターダイクは『球体圏』（*Sphären*）第一巻「泡袋」（Blasen）において、トマス・マホ（Thomas Macho, 1952–）から「非対象」（Nobjekt）という語を借用しながら、フロイトの心理性的発達理論の第一段階である口唇期に先立つ主客以前のダイアド（二項関係）を説明しようとしている。

> 母－子－現実（Mutter-Kind-Wirklichkeit）を対象関係の諸概念で説明しようとすることは、病原的な企てとまでいわないまでも、無益なことである。なぜなら、そのことがら〔＝母－子－現実〕自体には、主客関係がどこにも存在しないのだから。（Sloterdijk 1998: 299）

そうして、対象との関係に入る以前、子宮という「球体圏」（Sphäre）のなかでの胎児の経験が語られていく。

とはいえ、思弁的になりすぎることにも注意が必要であろう。大人に対するようにして胎児にインタビューをすることはできないけれど、胎児の知覚についての科学的研究をおこなうことはできる。そうした研究も進んでいるとはいえ、未解明のこともまだまだあるであろう。哲学以外の諸科学の知見を参照しながら、学際的に研究を展開する必要がある[1]。

[1] 西平直は『誕生のインファンティア』（2015）において、「胎児」はいつ「人」になるのかという問いに関連する学知として、法学、医学、生命倫理学に触れながら、それぞれの論点をまとめている（西平 2015: 169–175）。一人称視点の考察があくまで「人称」に関わるかぎり、「胎児」はいつ「人」になるのかという問いは、「胎児本人の視点」なるものがそもそもいつ獲得されると考えられるのかというより基礎的な問いであるといえよう。

以上、森岡の第一の疑問点への応答からうかがえるように、一人称の視点から〈生まれる〉を考察するのはたいへん困難であり、また狭く捉えられた哲学という学問分野に閉じていては遂行することのできないプロジェクトでもある。そこで筆者は、出生についての学際的な研究領域として出生学（natology）という学を構築することを提唱したいと考えている。ここでその構想についても述べ、一人称視点の研究の必要性を改めて強調しておこう。

死については死生学（thanatology）という医学のみならず哲学や宗教学、文学、芸術といった多様な分野を含む学際的な研究がある。それに対して、生まれることについて、また生まれることや生まれるもの、産むものに対する人間の関わり方についての学際的な研究は、まとまったかたちではみられない[2]。そのような不均衡状態がみられるのである。

出生学（natology）という構想は、オーストリアの哲学者、アルトゥール・R・ベルダール（Artur R. Boelderl, 1971–）が用いている Natologie という言葉に由来する（Boelderl 2007）。ドイツの哲学者、ルトガー・リュトケハウス（Ludger Lütkehaus, 1943–2019）も Natologie や Natalistik という言葉を用いながら、「哲学的死学」である死生学（Thanatologie）に対して「出生の哲学」を展開しようとしている（Lütkehaus 2006: 9）。ただし、リュトケハウスは出生の哲学を出生学としているのに対し、ベルダールは出生の哲学を哲学的出生学と呼んでいる点に若干の立場の違いがある。さきに述べたように、筆者は死生学に伍するような学際的な出生の学を展開することの必要性を訴える立場に立つ。そこで、ベルダールの語法を参考にして、出生の哲学のことを哲学的出生学と呼び、それを含んだ学際的な出生の学のことを出生学と呼ぶことにする。

学際的な出生の学としての出生学には、哲学のほか、宗教や文学、芸術などに関わる人文諸学、発達心理学や出生前（prenatal）、周産期（perinatal）に関わる心理学、精神分析学、新生児学（neonatology）や産科学、助産学などの医学・看護学領域が含まれるであろう。そうした学際的な出生学のなかで、哲学的出生学に課される課題とは、さしあたり、関連する基本的な概念を批判的に再考・再構成し整理することであるといえよう。今後学際的に発展していく出生学の案

[2] 出生は死と同じくらい、ライフイベントとしてはきわめて重大なものであるにもかかわらず、たとえば、死生学が深く関与するスピリチュアル・ケアの文脈においても、出生はそれほど探究されていないという指摘もある（Crowther et al. 2021; Wojtkowiak & Schuhmann 2022）。日本の「いのちの教育」においても事情は同じである。

内役、それが筆者の試みる哲学的出生学である。

哲学的出生学は、森岡正博の提唱する生命学の基本的発想、すなわち、「生命学とは、自分をけっして棚上げにすることなく、生命について深く考え表現しながら、生きていくことである」（森岡 2007: 448）という基本的発想に沿って展開される生命についての思索である。森岡によれば、「生命学は、生命学をしようとする人の数だけある」（森岡 2007: 448）。生命学の一展開として出生学を捉えるとき、出生学もまた人それぞれということになろう。

自分を棚上げにしないために、筆者はここで、自分が男性であることを断っておかなければならないだろう。筆者はシスヘテロ男性である。このことは、筆者が出生に関心を向ける際の姿勢を特徴づけている。その特徴とは、産むことよりも生まれることに注目するということである。出生（birth）というと、生まれることと産むことの両方を含んでいる[3]。実際、フェミニスト哲学は birth の哲学として産みの哲学を展開している。しかし、筆者は産むことに接近しがたく感じ、birth といっても being born の側面を特に考えようとしている。そして、being born のことを「一人称の〈生まれる〉」と呼んでいる。

たしかに、体験談や文学作品などをつうじて女性の経験に触れることはできるかもしれない。たとえば、文月悠光の詩「あたしは天啓を浴びたのだ」では、自らが産みうる性であることを「天啓」のようにして自覚した少女の心境が表現されている[4]。

> 「きみは孕みやすいから、おかあさんになるといいよ」
> という天啓を浴びた誕生日の朝、ランドセルを残して家を出た。
> 声が海ならうたうたいに、疾風を漕げばランナーに、髪を振り乱せばおんなになれる。そのことを、あたしはこれから証明しに行く

また、小川洋子の小説「妊娠カレンダー」には、自分自身ではないかのように感

[3] 反出生主義における「出生」という言葉の意味について論ずる中川優一は、「出生」という言葉には「産む」ということが十分反映されていないと指摘し、新たに子どもを産むべきではないという主張をおこなうものを反出生主義ではなく反生殖主義と呼ぶことを提案している（中川 2020）。このような立場に立てば、出生の哲学という言葉によって指示されるのは生まれることの哲学であるということになり、以下のような弁明は必要ないかもしれない。

[4] 引用は『屋根よりも深々と』（文月 2013: 25）より。初出は『読売新聞』夕刊、2010 年 7 月 31 日。

じられる妊娠した身体のあり方が描写されている箇所がある[5]。

> 「枇杷じゃなきゃ意味がないわ。枇杷の柔らかくてもろい皮とか、金色の産毛とか、淡い香りとかを求めてるの。しかも求めてるのはわたし自身じゃないのよ。わたしの中の『妊娠』が求めてるの。ニ・ン・シ・ンなのよ。だからどうにもできないの」
>
> 姉はわたしの声を無視して、わがままを言い続けた。『妊娠』という言葉を、グロテスクな毛虫の名前を口にするように、気味悪そうに発音した。

このような記述を頼りに女性の経験を想像することはできるかもしれないけれど、やはり、男性である筆者にはそのどれも実際に体験して理解することができない。この点において、産むということや妊娠するということ、産みうる性であるということから距離をとらざるをえないと筆者は感じる。仮に語ろうとしても、そこには埋めがたいほど深い溝が残ってしまうだろう[6]。

このような背景から、筆者が出生について考えるときはいつも、子ども（息子）からの視点への偏りを伴っており、産みに関わる視点が希薄であるという欠点がつきまとう。それは、私が遂行する（哲学的）出生学の限界を意味している。それは、他の人たちによって別様の（哲学的）出生学が展開される必要性を示してもいるだろう。

実際、生まれることを子ども視点で考えることは批判されうるし、そうではないあり方で出生学は展開されうる。たとえば、「死と並ぶ人間の条件である（はずの）産みを、一人の男性哲学者が自らのポジショナリティを捨象することなく哲学的に探求すること」（居永 2015: 123）により男性学的「産み」論を展開し、「産まない」身体としての男性的身体の解体をも目論む居永正宏の取り組みがある。それに比べれば、筆者が展開しようとする哲学的出生学は、男性研究者がおこなう研究としては徹底性に欠けるかもしれない。たとえば、「単にパートナーと共に産みに関わった男性に留まらず、そもそも「自分の子供」を持つという

[5] 引用は文春文庫版『妊娠カレンダー』（小川 1994: 54）より。初出は『文學界』1990 年 9 月号。

[6] 檜垣立哉が『子供の哲学』において「著者個人は、生物学的に男性であるので、遺憾ながら（この点、きわめて遺憾ながらと本心からおもっている）、子供を直接産む経験はしたことがないし、今後もできないとおもう」（檜垣 2012: 21）と述べているのに近い。

経験を持たなかった男性（および女性）についても、社会に張り巡らされた産みの営みのネットワークの中に否応なく組み込まれているという意味で、産みと繋がっている」（居永 2015: 116）という居永の指摘は正当であり、その意味では、筆者のように子ども（息子）の位置にとどまって「産み」への関係に立ち入らない態度は許されないのかもしれない。実際、居永は、筆者とおおむね同じ視点から研究をおこなっているリサ・ギュンターの「他者からの存在」（Guenther 2008）という実存把握について、それは「その他者によって産まれた存在からの視点、要するに子供の視点からの把握」であり、「それでは産みの主体が他者化され、〔……〕受肉した存在性を剥奪されてしまいかねない」として、「産みの哲学的探求は、「産まれたこと」ではなく「自分が産む」ということを第一の主題としなければならない」と述べている（居永 2015: 110）。居永のこの指摘を受け止めれば、筆者がおこなおうとしている哲学的出生学は産みの哲学ではなく、産む主体を他者化する営みであることになる。とはいえ、そうであるからといって、生まれることの哲学は産みの哲学に対して不要なものであるのだろうか。

筆者は居永の指摘を受けてもなお、「他者からの存在」という視点に一定の正当性があると考えている。というのも、たしかに産む主体からすれば産まれてきた子どもは紛れもなく自分から肉体的な出来事をとおして産まれてきた人間であるのだが、産まれてきた側はその時点でその光景を産む側として見ることも観察者として見ることもできないのだから、特定的で肉体をもった誰かとして産む主体を考えることはできない。産む主体は産まれてきた側にとってはやはり「他者」であるのではなかろうか。特に、産みに対して相対的に距離があると感じている筆者のような者の率直な自己把握としては、「他者からの存在」という把握が妥当ではなかろうか[7]。

男性研究者による出生についての研究のあり方として、男性と「産み」の関わりを問う居永のような試みはもちろん可能かつ必要である。しかし一方で、われわれが「他者からの存在」、他者から産まれてきた存在であることは、「産み」に注目してもなお否定できないであろう。この素朴な、きわめて素朴な自己把握から出発する〈生まれてきたことの哲学〉（philosophy of being born, Philosophie

[7] とはいえ、パートナーとともに「産み」についてさまざまな会話をするなかで、筆者にとってこの立場も不動のものではなくなりつつある。

des Geborenseins）も可能かつ必要ではないのだろうか。母親という起源を抹消してきた男性中心主義的で家父長制的な哲学の伝統のなかでは、産まれてきたものの視点からの哲学的探究も十分になされてきたとはいいがたいのだから、生まれてきたことの哲学もある意味では革新的なものである。

また、産まれてきたものの視点からの哲学によっても、その思考・調査の過程で肉体的な「産み」の出来事に触れることは可能であり、また必要でもあり、それをとおして結局は「産み」についても考えることができるし、考えなければならなくなるということも重要である。居永は「「産まれたこと」ではなく「自分が産む」ということを第一の主題としなければならない」（居永 2015: 110）と述べるが、「産み」の哲学に到達するためにまず「産まれたこと」に着手してもよいと筆者は考える。すなわち、哲学的出生学はたしかに「産み」の哲学として展開されることもできるが、必ずしも産むことが第一の主題とならなければならないのではなく、生まれてきたことを第一の主題としてもよいと考える。

このようにして、筆者は自分の立脚点を捨象することなく哲学的出生学を展開することが可能であると考えている。筆者にとっての哲学的出生学は、さしあたり、生まれてきたものの視点からなされる一人称的なものであり、〈ある人間にとって自分が生まれることはどのような意味をもつのか〉という問い、それが筆者の哲学的出生学が取り組む問いなのである。

さて、一人称視点からの考察についての弁明が長くなったが、森岡からの二つ目の疑問点に移ろう。

二つ目の疑問点は、「無からの主体の生成」、筆者なりに言い直せば、「ほんとうの〈生まれる〉」とでもいったことについてどのように考えるのかという点である。正直にいえば、この点は、筆者もどのようにして扱ってよいかがわからないままであり、批判されるのももっともである。

拙稿の枠組みでは、〈生まれる〉ないし〈現れる〉の条件が、他者に知覚されることになっていると思われる。しかし、やはり、一人称視点に立つのであれば、他者に知覚されないでもその人は存在しているはずであって、他者に知覚されるより前の段階、すなわち妊娠のきわめて初期の段階、受精卵の段階などについて、一人称視点の考察はどのように向き合えばよいのかということは非常に重要な問題であるはずである。その点を看過し、子宮内であっても周囲の大人に知覚される段階のことを被産性の第一相として考えていたのは、拙稿の欠陥とい

わざるをえない。

「被産性」という概念は、アーレントの出生性（natality）概念によって〈生まれる〉を考えることができると素朴に考えている人々に対する批判のためにつくったものであった。その目的を達するため、一人称視点を貫徹し、「無からの主体の生成」から公的空間への〈現れ〉までを貫いた統一的視座を提供できる「被産性」概念をつくることが今後の課題である。

その点では、森岡の提示したハイデガーの被投性（Geworfenheit）概念と被産性との比較に、被産性概念の今後の展開可能性があると考えられる。

たとえば、A. M. ヘネシー（Hennessey 2017）にしたがえば、ハイデガーの『存在と時間』における「死」への注目は 20 世紀・21 世紀の大陸哲学に多大なる影響をおよぼしており、それに対して、エマニュエル・レヴィナスやモーリス・メルロ＝ポンティといった現象学者がこんにちのフェミニスト現象学などにつながるような生殖や女性の経験を扱う現象学（稲原 2020; 中 2021）の領野を切り開いてきたし、拙稿で中心的に扱ったようにハンナ・アーレントが出生性（natality）という概念を提起した。

ただ、そうしたものとは異なるハイデガー現象学への批判的応答もあった。それが、ジャン＝リュック・マリオン（Jean-Luc Marion, 1946–）やクロード・ロマーノ（Claude Romano, 1967–）といった現代フランスの現象学者たちによる「誕生」への注目である。かれらは出来事の現象学と呼びうるような一連の研究を展開しているが、そのなかで「誕生」が注目されている。たとえば、フランソワーズ・ダストゥール（Françoise Dastur, 1942–）は次のように述べている。

> 生まれるということはわれわれの存在を構成していることであるが、それは永遠の驚きである。これが、この原初の出来事が制御不能な性質をもつということの証しである。新しい出来事のたびに、誕生という原初の出来事が繰り返される。（Dastur 2000: 186）

みられるように、「誕生」は出来事の典型として扱われており、「驚き」をもたらすものとされている。上記のダストゥールの叙述にみられるような出来事の典型としての「誕生」の描写は、ロマーノの次のような記述とも関係しているであろう。

〔世界内存在は〕世界へと生まれるかぎりにおいて世界内に存在している。／それゆえ、他のすべての出来事の起源であるこの起源的な出来事が、事実性（facticité）という観点では厳密には考えられないように思われるのである。〔……〕誕生は世界内存在の存在論的構造とはなりえない。むしろ、そこではたらいているのはまさしく、世界の出来事性である。（Romano 1998: 98）

このようにして、ロマーノは、ハイデガーにおける現存在の実存範疇である被投性によっては考えられないものとして、〈生まれる〉を提示しようとしている。「私が世界に投げ込まれた」と考えるハイデガーに対して、ロマーノは、「私が生まれたと同時に世界も出来した」という視座を拓き、事実性・被投性を超えた出来事の性格を捉えようとしているのであろう[8]。

とはいえ、世界や出来事への注目からわかるとおり、ロマーノの議論では、居永や筆者などとは異なって、母親という他者が自己を産んだということよりむしろ、自己の誕生の瞬間において他者も含めた世界自体が開かれる（贈与される）ことが重視されている。それはそれで興味深い視点ではあろうが、やはり、人間的な事象としては、人間が人間を産むということは無視できない事実であり、そうした肉体的な現象も組み入れながら、ハイデガーの被投性やアーレントの出生性では考えることのできないような〈生まれる〉独自の受動性――私が受動的に生まれるということはあなたが私を産んだということだ／あなたが生まれたということは私があなたを産んだということだ――についての考察を展開する必要性は依然として主張されてよいであろう。

ハイデガー現象学に端を発する〈誕生〉・〈生まれる〉についての議論としては、以上のように、少なくとも、（1）アーレント、（2）マリオン、ロマーノらの現代フランスの出来事論的な現象学、そして（3）メルロ＝ポンティやレヴィナス、およびフェミニスト現象学がある。しかし、管見の限り、現時点ではそれらを総括した研究は存在せず、〈生まれることの現象学〉とでも呼ぶべきものの全体像が把握されていない。上記三つの潮流がお互いを補い合って出生の哲学を構築することができれば、筆者が提示した「被産性」を塗り替えるようなより

[8] ロマーノの〈誕生〉論については、佐藤（2014）、伊原木（2017）、Raffoul（2020）などを参照のこと。

適切な概念が鋳造されるかもしれない。いまだ従事する人の多くはない当分野が発展を遂げることを期待しつつ、筆者もまた思索を続けていきたい。

文献

Boelderl, A. R. (2007). *Von Geburts wegen. Unterwegs zu einer philosophischen Natologie*. Königshausen & Neumann.

Crowther, S. A., Hall, J., Balabanoff, D., Baranowska, B., Kay, L., Menage, D., & Fry, J. (2021). Spirituality and childbirth: An international virtual co-operative inquiry. *Woman and Birth*, *34*(2), e135–e145.

Dastur, F. (2000). Phenomenology of the event: Waiting and surprise. *Hypatia*, *15*(4), 178–189.〔＝小関綾子［訳］（2002）「出来事の現象学――待つことと驚き」『現象学年報』*18*, 3–14.〕

Guenther, L. (2008). Being-from-others: Reading Heidegger after Cavarero. *Hypatia*, *23*(1), 99–118.

Hennessey, A. M. (2017). How childbirth became philosophy's last taboo: Why don't the humanities speak about birth? IAI TV, August 10, 2017. 〈https://iai.tv/articles/why-do-the-arts-put-death-before-birth-auid-867（最終確認日：2023 年 3 月 31 日）〉

Lütkehaus, L. (2006). *Natalität. Philosophie der Geburt*. Die Graue Edition.

Raffoul, F. (2020). *Thinking the event*. Indiana University Press.

Romano, C. (1998). *L'événement et le monde*. PUF.

Sloterdijk, P. (1998). *Sphären. Mikrosphärologie. Band I. Blasen*. Suhrkamp.

Wojtkowiak, J., & Schuhmann, C. (2022). Natality and relational transcendence in humanist chaplaincy. *Religions*, *13*, 271.

居永正宏（2015）「フェミニスト現象学における「産み」をめぐって――男性学的「産み」論の可能性」『女性学研究』*22*, 99–126.

稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優［編］（2020）『フェミニスト現象学入門――経験から「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版

伊原木大祐（2017）「出来事の現象学的地位――マリオン、ロマーノ、還元の問題」『基盤教育センター紀要』*29*, 1–17.
小川洋子（1994）『妊娠カレンダー』文藝春秋
佐藤国郎（2014）『非所有の哲学を求めて――出来事との遭遇』アルテ
仲井慧悟（2023）「被産性の三相――人間にとって〈生まれる〉とはどのようなことか」『哲学の門：大学院生研究論集』*5*, 19–33.
中真生（2021）『生殖する人間の哲学――「母性」と血縁を問いなおす』勁草書房
中川優一（2020）「産むことと生まれてきたこと――反出生主義における「出生」概念の考察」『現代生命哲学研究』*9*, 54–79.
西平直（2015）『誕生のインファンティア――生まれてきた不思議、死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議』みすず書房
檜垣立哉（2012）『子供の哲学――産まれるものとしての身体』講談社
文月悠光（2013）『屋根よりも深々と』思潮社
森岡正博（2007）「生命学とは何か」『現代文明研究』*8*, 447–486.